
はんぶんこ

ホタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はんぶんこ

【ZPDF】

Z3977A

【作者名】

ホタル

【あらすじ】

突然の雪の我儘に、僕はしぶしぶお山場へ向かうこととなつた。
そして、いろんなことを思い出す。

「ねえ、お台場で海がみたい」

雪からの突然の電話に、うん。と答えて電話を切ろうとした僕に

雪は

「今から」

という意味不明な言葉を、ちょっと醤油取つて、とでも呟つよう
に簡単な口調で言つた。

深夜一時過ぎに。

壊れているのは時計だと願つたが、机の上に置いてある一つの田
覚まし時計は同じ時間を指し、一秒に一回の時を定期的に刻んでい
る。むしろ壊れているのは雪の思考回路だらうか。

布団から出している手と顔がひりひりするほどに寒いのに、寝起
きの頭は働く上手く断る言葉は浮かんでこない。

「どうしても？」

「どうしても」

半ばあきらめながらストーブに手をかけた。

しばらくガス焜炉に火をともすような音が響くと一気に暖かい風
が排出された。乾いた部屋がさらに乾いていく。咽が渴いたけれど、
布団から出るにはまだ寒すぎる。

「でも」

「こきたい」

雪の我儘はめずらしいし、こんな突然な我儘は記憶に無い。

何となくいやな予感をしながらも、電話に出てしまった自分に後
悔していた。

「わかった」

観念して、僕はぐずぐずと温もりの残る布団から出た。

電気をつけ、まだ睡眠不足を訴える頭を犬のように振つて水を飲
んだ。

顔を洗いながら何かの記念日だったか考えてみたけれど浮かばない。

誕生日でもないし、初めて付き合った日でも、初めてデートをした日でもない。

服を選びながら、こんな夜中に服を選んでいる自分があほらしく思えてきたけど、スウェットで行くわけには行かない。結局、ほとんどユニクロで統一された服にキャスケットを被り車のキーを手に取ると外に出た。外は一段と寒い。吐いた息は常にせつな的な白色を作り出して消える。

エンジンは一回でからず二回でやっとかかると雪にメールを入れた。

あと十分で着きます

途中の道路で、人は一人もいない。カーブにかかるたび、バックミラーにかかる少しお汚れたふーさんのマスクが揺れた。初めてドライブでゲームセンターへ行ったときに、雪に頼まれて取ったふーさん。その帰り道、話につまつてはふーさん口調では、ち、みつつ。と心の中で繰り返したことを思い出す。

私、自分の名前が嫌い。

は、ち、みつつ。

冬は寒いからきらい。

は、ち、みつつ。

夏は暑いからきらい。

は、ち、みつつ。

春は花粉症になるから嫌い。

は、ち、みつつ。

ねえ、きいてる?

は、ち、みつつ。

秋は好き。

……。

秋の名前が良かつた。

どんぐりとか?
わるくないわね。

雪が何かを嫌いというたび僕は心中ではちみつを唱えた。

雪の家の近にある六台ほど停められる駐車場には、いつもとまつている赤のビッグは今日もとまつっていた。地面に広がる少し大きめな石は、車を動かすたびにタイヤに踏まれ、じやらじやらと音を立てた。僕はこの音が好きで、いつもより多めにハンドルを切って駐車する。

サイドブレーキをかけると、携帯を手に持つ。
つきました

メールを打つと雪はすぐに姿を現した。

「ありがと」

助手席に座ると雪はまずそう謝った。

「いや」

なんだか呼ばれた理由をきくタイミングがはずされた気がして、一人黙つたまま車を走らせ始めた。のぞりと動く車がなんだか僕と雪の空氣に遠慮している気がした。

「さむい?」

「つりん、だいじょうぶ」

「さこきん」

「うん?」

「最近ラーメン食べにいってないね」

通り過ぎたラーメン屋を見て雪は言った。

雪と付き合い初めのころ、よくラーメンめぐりをした。

僕はとんこつが好きで、雪は味噌が好きだった。お互いそれぞれの有名店を探しては車で一緒に食べに行つたことを思い出す。

ラーメン屋に行く途中、通り過ぎる看板の文字を、雪がぽつぽつと言つ度に僕はよそ見運転をした。たまに可笑しな看板を雪が笑うと、僕は気になつてしまらくなつた。

そんな僕を見て雪は更に笑つた。

ラーメン屋では向かい合って座りながら、最初のスープ一口飲んで眞いといったら美味しい。何も言わず麺に箸をつけたら不味いと いう決まりを作った。最初の一口、次に言葉が出来るのか箸が出るのか、店主でもないのにその緊張感は僕は好きだった。時折とんこつと味噌がある店に行くこともあると はんぶんこしよ。

と雪は言つて、半分ずつ食べた。その行為が好きで、僕はときおりとんこつも味噌もある店を探した。

あの頃一年で体重はお互に一キロ増えた。

お互いギャグでそんなこと言つたと思つていたのに、夏までに雪はきつかり三キロ痩せたけれど、僕の体重はさら一キロ増えていた。

そして、ラーメン屋には行かなくなつていった。

夜中の車は早い。

料金所に手を伸ばすと冷たい風が腕に絡んでは通り過ぎた。

「初めて一緒にお台場にいったのいつだっけ

「もう二年前だよ」

そう答えて、何か大切なことを忘れているような気がした。

「ゆき、お台場すきじゃなかつたよね」

そう言つと、雪は小さく笑つた。そして、今の季節のように寒くて乾いた笑いだった。

「そうだね。今でもあんまり好きじゃないよ」

「じゃあ、何で急に

「なんとなく」

何となくといつ言葉よりも本当のことを言つてくれないことに僕はちりちりとした怒りが込み上りってきた。そんな表情が雪に解つたのだろう。無口な時間がしばらく続くと、

「ごめんな、でもなんとなくなの」

雪がもう一度繰り返すと、怒りの矛先は方向を見失つた。

お台場なんてカツプルが多いから嫌いといつていた。

一年前はまだ淡い付き合いだった。僕はデートといつたらお台場という単純な思考の元に行って、僕の浮かれたテンションに乗り切れない雪は初めて、「ごめん、お台場好きじゃないんだ。と言ったから、お好み焼きだけ食べていそと地元まで戻った。

「きれい」

レインボーブリッジで雪は言つた。

そこで僕は思い出した。

雪の友達が言つたこと。

三年間付き合った元彼と、お台場で海を見ながら別れたことを。

雪は、まだ外を見ている。

雪の髪が何だか切なかつた。

このままお台場の海に着いたら、僕らの関係は終わつてしまつ。何となく解つていた。最近会うことも少なくなつたし、だからこそ、今日の電話にも出てここに向かつていることを。なんとなくお台場に行きたいというのは、なんとなく別れる時期を感じたということ。そしてそのなんとなくは、今までの僕と雪の関係でもあるような気がした。

「やつぱり」

ぼくが言つと、雪は僕の目を見た。

「やつぱりお台場の海ははなしだ」

レインボーブリッジを過ぎて、僕は再びレインボーブリッジに向かつた。

「そう」

雪はそう言つて笑つた。

久々に雪の本当の笑顔を見た気がした。

「どこいこつとか」

僕が言つと

「どこでもいいよ」

雪は応えた。

「ちょっとお腹がすいたかな」

「うーめんでも食いに行くか」

僕等ははんぶんこが好きなことを思い出した。

スピードを上げて、外は寒いだろうけれど、車の中は暖房がきいている。

ラーメンを食べたら、次にどこへ行こうか一人で考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3977a/>

はんぶんこ

2010年10月8日15時04分発行